

## 談話室

## 私の受けた一般教育

石川 徹

「私の受けた一般教育」という題を与えられたものの、何を書くべきか困惑してしまふ。勿論、私とてきちんと大学を卒業している以上一般教育科目の単位は習得しているはずである。しかし、実際には語学と体育以外の授業はほとんど出席していない。明け方に寝て、午後起きだし、大学に行くのも友達に会うためだった。このような生活は、別に特別ではなかったように思う。クラスの半数近くは似た様なものだった。正規の四年間で卒業した人間は半数に満たなかったのだから。しかし、自分の怠惰であった学生時代を回顧していても仕方がない。問題はこのような生活と大学の授業の間に何か繋がりがあったのだろうかということであろう。

私の卒業した京都大学は、一回生の語学と体育以外は、ほとんど指定の時間はなく、とにかく開設されている授業ならば取ることが出来た。また年間に取得できる単位の上限もなく、確か、私も上記の様な状態であったにも関わらず、1回生の時に60単位以上取っていたはずである。先輩の助言に従い勤勉な友人をつくっていた事の成果であったろう。その当時専攻は哲学を選ぶと決めていたものの、現在のように分析哲学・科学哲学の方向に進むとは思ってもいず、むしろ現象学や実在主義に淡い期待を抱いていた。しかし、具体的には何ら明

確なプログラムもなく、せいぜい入門書、解説書の類を眺めているという状態であったように思う。さてこの様に方向が定まらない、しかも怠惰な学生が、ほとんど強制のない、指導もない、単位認定は甘く、選択肢だけは多いシステムの中に入るとどうなるか。この一つの答えが、最初に述べた私の状態である。しかし、誤解のないように言っておくと、私はこれでシステムの批判をしようというつもりはない。勿論あの頃もっといろいろしておけばよかったという個人的な反省はあるものの、あれはあれで良かったのではないかと思っている。京都大学のように、ある意味で放任の所であればこそ、私の様なものもやってこれたので、もっと強制の強い大学ではドロップ・アウトしていたかもしれない。しかし、これもあくまで私個人にとっての話であって、一般化するのには危険であるかもしれない。というのも、一般教育の意味は、やはり人によって違うように思われるからである。

まず学部によって違いがある。理系の学部、特に工学部では専門課程に入るための勉強という意味合いは、かなり強かったように思う。実験等指定されていた科目もかなりあったようだ。こういう学生たちにとって、人文・社会系の勉強というのは、まさに専門に対する教養という意味合いが強いであろう。ここから逆に一般教育無用

論も出てくるのではないかと思われるが、それはともかく、一般教育の意味という事に関してにははっきりしている。文系にしても法学部、経済学部はある程度同様のことが言えるのではないか。彼らは大部分は卒業して、企業に勤める。その事に対してどういう意見を持つにせよ、専門教育はそのために行われているという側面を持っている。それに対し一般教育というのは、直接的に役に立つというよりは、むしろ現実に対しては様々なスタンスを取り得るのだという事を示すためにあるように思われる。教養のある人間というのは、単に博識であるということなのではなくて、現実に対して一面的でない、批判的なスタンスを取り得る人間の事だろうからである。もっとも、就職したところで大学での知識が役立てるような部署につく人間の方が少ないであろうから、大学全体がこの様な機能を第一に持つものと考えべきかもしれない。では私の所属していた文学部ではどうか。親しかった人間に限れば、卒業後就職するとはっきり考えていた人間は一人もいなかった。自分のやりたいことが明確である人間は、専門に対しての教養という意味付けが可能であろうが、私の様な自分の足元

の定まらない人間にとっては、むしろ何かコミットする事を嫌う気持ちが強く、従って、私の受けた一般教育というのは、具体的な授業とかではなく、不安を抱えつつも、ただひたすらに怠惰に過ごしていたあの頃の時間の事だったように思う。

この様な文章は、恐らく題目を与えた編集者の意図に反するものであろうが、創作をするわけにもいかないのでお許しを願いたい。こうしてあの頃のことを振り返って見ると自分が一般教育の授業を担当しているという事も何か皮肉な気がする。多分あの頃の自分と私の授業を聴いている学生とを重ねあわせる事は間違いなのであろうが、それでも、ただ単に単位を取っていくというのではなく、各自の生き方にとってなにがしかのヒントになればと思い、極力、専門的な術語を避けて、日常から例を取って、哲学的問いのなんたるかを説明しようとしてはいけるのだが、その結果たるやはなはだ怪しいものである。しかし、この方向だけは守っていきたいと思う。

最後に、この様な形であの時代を振り返って見る機会を与えて頂いた事に、皮肉ではなく感謝して、この駄文を閉じたいと思います。

## 一般教育について 一雑感一

若林和幸

学部・大学院と、都合10年近くを学生という身分で、教壇を冷やかに眺めていた人間が、いきなり「俎板の鯉」のごとく教壇に引き出されるようになり、約3か月が過ぎた。この間、一般教育の生物学と学部の

専門科目を担当し、一応は、教官側の立場にいたのだが、実感としては、まだ半分ぐらいは学生側という感覚が残っている。そこで今回は、学生側の自分が感じた一般教育に対する疑問や感想という形で書いてみ

たい。

まず、一般教育に対しての最大の疑問は、何のために一般をするのかという点である。簡単に言うとな般の意義が見えないということである。よく聞く、一般教育の理念や重要性といったものは、頭では理解できるが実感がまったく伴わないように思える。

すなわち、高度な理念を言われても、それを実際にどのように適応・応用させられるのかという“方法”が知らされないので非常に空虚に感じられるのだと思う。これを最近の生物学にたとえると、遺伝情報のDNAの塩基配列ばかりがわかったのに対し、それらと実際の生命活動との間の関係がblack boxとなっていることと類似しているように思う。

一方、上記した“方法”を自ら学び、導き出すのが大学生の勉強であるという意見が出ると思われるが、大学に入り、いきなり「自ら探究せよ」などとカッコのよいことだけを言われても単なる建前論を聞かされているようで白けてしまうだけである。また、実際の授業についても、理科系の場合などでは、2年目からかなり多くの専門科目が入り、一般は実質的に1年間だけということが多い。このような状況で、一般教育の重要性を聞かされても懐疑的になってしまう。

次に、一般教育の授業内容については、専門の縮小版といったものから、一般的・概説的なものまで、さまざまである。授業ごとにvariationがあること自体は大変好ましいことと思うが、もし一般教育がある一

定のレベルを必要とするものであると考えると、何らかのguide lineやoutlineが必要となってくるのではないだろうか。そうであれば、私自身もそうであったが、一般は、自分の興味より単位が取りやすい授業を選ぶ傾向は、なくならないと思う。また、理系の立場としては、一般での理系の授業は、理系の学生用、文系用というように分けた方が、効率がよいように思う。

しかし、いずれにせよ、やはり学生側としては、一般は“勉強は最少、単位は最大”という言葉が一番fitしているように思う。

一方、教壇に立つ側としては、上に書いたことがそっくり自分に返ってくる。専門科目の場合は、自分の研究分野を中心に話をすればよいので、比較的プランが立てやすいが、一般の授業で、広い範囲にわたる分野の中から内容を考えいくつかの事項を選択し、それらを今度は、有機的にintegrateさせるなどという芸当は、今の自分としては不可能である。ごく最近まで、自分の研究分野以外は、ほとんど興味のなかった人間が、たかだか、2～3か月の準備で、まともな一般教育の授業を行うというのは、ほとんど奇蹟に近いように思える。このような場合、何らかの内容的なguide lineが示されていればいくらか、プランも立てやすくなると思う。

以上、いろいろと書いてきたが、学生側、教官側の双方の立場から見てきて、一般教育のもう少し具体的な意義や内容面でのoutlineが示されることが必要ではないかと思う。

## 一般教育雑感

小林 立

新制大学のもつ最大の特色の一つは、専門教育とともに一般教育が導入されたところにあるという。一般教育の導入には米国の指導が大きく作用しているといわれるが、戦後の大学改革の目標が、大東亜戦争のような無謀な戦争を日本が引き起こすことのないよう広い視野をもったすぐれた指導層の養成にあったとしてもおかしいとは思われない。大学は高等教育機関であり、そこに学ぶ大学生は将来、社会の各分野において指導層たることを期待されている人達である。従って、大学生は一般教育によって広い視野と豊かな人間性を培うことが不可欠の条件であると考えられたであろうし、大学の一般教育は専門教育とともに、いわば「車の両輪」としてその役割を期待されたに相違ない。新制大学の一般教育の設置は、歴史的教訓の上に導入されたものであると考えて間違いあるまい。

そのように大きな役割を荷なって導入された一般教育であるが、現実はなかなか厳しく、「皆が嫌がる一般教育」とか「何の役にもたたない一般教育」とか意外な酷評が聞かれるのは何故だろうか。恐らく、一般教育という教育課程は従来の日本の大学教育には存在しなかったものであり、実用と効率をなによりも重視する社会的環境の中では、当面すぐ役にはたたない広い視野と豊かな人間性を育成するという理念は簡単には受け入れられないからではなからうか。それにまた身近な理由としては一般教育は

多人数の授業が常態であることが挙げられるのではないか。受講生が多ければ教室も広くなければならぬし、マイクも必要だし、少人数の授業とはエネルギーの消耗もちがうことだろう。受講生にとっても集中力は散漫になり、授業効果も低下するに相違ない。同じ1コマの授業でも試験の答案枚数は受講生に比例するし、多人数の授業では論述作文の提出を求めても添削し返却するというような指導は至難の作業となるのではなからうか。

専門教育とはちがって、一般教育の授業は受講生の数が多くなるのは当然といえば当然なのであるが、多人数の授業が招来しているマイナス効果はやはり無視できないのではないか。FDが唱導される所以であろう。しかも一般教育の多人数の授業は制度的には是認されているのではないかと思われるところがある。すなわち学生40名の定員に対して、一般教育は教官2名であるが、専門教育は教官10名で指導するきまりになっているといわれる。それが事実とすれば、一般教育と専門教育の比率は、1対5ということになり、一般教育において教官1名が講義を1時間行う場合、専門教育では5名の教官が各々1時間の講義を合計5時間行うことになる。時間数の上からも、一般教育の講義が概論的内容になるのは自然であり、専門教育の講義が詳細な内容になるのもまた当然である。本来、一般教育の概論的講義こそ、広い視野を培うた

めに必要なものであるが、それに対して「空洞化」とか「形骸化」とかいう批難を浴びせるのは、一般教育の目標を理解しない議論というべきであり、まして一般教育を専門教育の導入部、基礎教育と見做したり、一般教育の履修義務に異議を唱えることなどは、言語道断といってよいのではなからうか。

もしも、1対5というこの比率が、まだ占領軍の強力なバックがあった時期に決められたものだとすると、その後、日本が独立国となって40年近い歳月が経過しているにもかかわらず、一般教育と専門教育の比率を改善しようとする議論が提出されなかったとしても、あるいは止むを得ないことだったということにならうか。とはいえ、1対5という比率は履修単位数や勢力関係の比率としてもそのまま反映されるといってよいのではないか。従って数が物をいうとすれば、この比率について目をつぶることはできないのではなからうか。もしまた1対5という比率に触れずにおくとすれば、「一騎当千」という言葉もあるから、一般教育担当の教官は正につわもの揃いでなければならないことを制度的に要求されているのだと言えば、正解となるのではなからうか。

新制大学の教育課程は、制度的に前半が一般教育、後半が専門教育というのが標準であると言えるが、入学したばかりの受講生から見て、「なぜ一日も早く専門科目を受講できないのか」という疑問が出されたとしても無理からぬところもあるのではなからうか。一般教育と専門教育の位置関係が、一般教育は専門教育のための導入部といった誤解や先入観を抱かせる原因として作用すると共に、新制大学の一般教育と専

門教育は、「車の両輪」でなければならぬという基本的な認識まで見失わせる結果になっているのではないだろうか。一般教育の意義と役割を制度的に矮小化しないようにするためにも「車の両輪」の観点からは、「くさび型」ないし「並行型」が望ましいと言えるのではなからうか。

一般教育という場合、一般的には「通常科目」「演習科目」「実験科目」のセットで考えられて来ていると思われる。「通常科目」というのは、人文、社会、自然の三系列における講義を主体とする授業に与えられている名称であり、それらをサポートするのが「演習科目」であり「実験科目」の授業であると言ってよいのではないかと思われる。従ってこれら科目名の差は、授業形式の差によるものであると考えられる。従ってまた教官の講義を主体として展開される授業に対して「通常科目」という名称を与えているのだとすると、「演習科目」と「実験科目」は、いわば“通常ではない科目”ということにならないだろうか。勿論、一般教育の主力が「通常科目」の授業であることは衆目の一致するところだと思いが、一般教育等として一般教育の周辺に位置する「外国語科目」や「保健体育科目」も視野に入れた場合、一般教育の「通常科目」という名称については、一種のこだわりを感じざるを得ないのではないか。「講義科目」という名称では不都合であろうか。

新制大学の発足後、40年からの歳月が経過したが、一般教育をとりまく環境は極めて厳しいと言ってよいのではなからうか。NHKテレビの高等学校講座を見ても知る通り、大学教官が担当していることが多い。してみると、高等学校の教科書の執筆者としても大学教官が参加している場合は多い

のではないかと推測される。従って、大学の一般教育の授業は「高等学校教育の繰返し」であるとか「大学に入学した新入生の勉学意欲の喪失の原因」といった極めて厳しい評価を蒙り易い外的環境が存在していることは否定できないのではないかと。殊に大学の一般教育を代表する立場にある「通常科目」の授業は批判にさらされ易いと言えるのではないだろうか。そうした批判にこたえ、改革の方途として打ち出されたのが、いわゆる「総合科目」の授業であると言えるのかも知れない。異系列の複数の教官によって共通の課題について授業を展開する「総合科目」こそ、一般教育の理念を体現するものであり、多角的で深い授業内容は従来一人の教官が担当する「通常科目」の授業を超えるものであると期待されているからであろう。かように「総合科目」はその無限の可能性と重要性を高く評価され、熱い期待が寄せられているのだが、他方では「総合科目」の授業を維持することの難しさも指摘されているのは何故だろうか。「総合科目」の授業は参加する教官の負担増によって実施されているからでもあろうが、累系列の複数の教官が取り組む「総合科目」は授業内容の関連性と総合性をもしも厳密に要求されるとしたら事前の準備と調整のための時間が多大なものとなるに相違ないからではなかろうか。それだけに世話人の苦勞と負担は想像を絶しているに違いない。教官の負担増を避けるために、「通常科目」主軸のカリキュラムから「総合科目」主軸のカリキュラムに改める必要があるかもしれないし、更にいえば千葉大学のように管理職の熱意と予算的措置も不可欠の要因となるだろうから、「総合科目」の発展には、まさに大学の総

力を挙げて取り組む姿勢が必要なことが証明されていると言えるかも知れない。

一般教育の充実発展を目指すには、何よりも1対5という一般教育と専門教育の比率自体を見過すことはできないのではなかろうか。素人の憶測でしかないが、この比率に触れずに一般教育の強化をはかろうとすれば、一般教育の実施組織を専門学部に移すという便法しかないのではなかろうか。その故かどうか知らないが、最近の報道によると教養部等の一般教育実施組織の学部への改組など、要するに「部」から「学部」への移行が唱えられていることから、そこには何かがあるのではないかと思われる。現に一部の大学では早くから「教養部」ではなく「教養学部」という名称を使っているのはどうしてだろうか。だてに「学」の文字を「教養部」に添加しているというわけではなく、もしかしたら「教養学部」と改めることにより、比率改善の問題に触れることなく、一般教育の充実がはかれたからではないのだろうか。事実関係はどうなっているのかご指教いただければありがたいと思う。

日本の歴史的教訓に学んで導入された一般教育は、専門教育とともに新制大学の教育課程における「車の両輪」とであると言ってよいだろう。しかし、1対5という不均衡な比率そのものは発足以後も一貫して変わることなく堅持されて来たと言えるのではないか。しかも大学における一般教育の軽視はそのまま日本の社会における一般教育の軽視に直結していると考えて構わないのではないかと。自然環境の破壊をはじめ集中豪雨の経済進出など、まさに国家全体として一般教養が極度に貧困な状況を呈していると言っても過言でないと思われる。世

界の先進諸国に伍している日本人のイメージが「エコノミックアニマル」という呼ばれ方をすることにも象徴的に表わされているのではなからうか。一般教育は広い視野と豊かな人間性を形成することを理念として導入された教育課程であると言わ

ねばなるまいが、戦後も依然として役にたつ専門教育の重視、役にたたない一般教育の軽視という片寄った姿勢が大学教育に止まらず、社会全体に拡大された結果に他ならないと言っても、あながちのはずれな考え方であるとは言えないのではなからうか。

## 数学との出会い

中 川 益 夫

一般教育に関連する論題提供になればと、以前、三回に亘って、『百人一書』と題する、私と百冊の本との出会いを連載させて頂いた。

今回、それらに引き続いて、私と学問—数学との出会いを振り返ってみようと思う。これまでのが、一般教育総合科目「読書論」（ないし「読書のすすめ」）への呼び水であるとするなら、これは「学問論」（ないし「学問のすすめ」）への地均しと考えている。総合科目の真の発展・前進に心を寄せる方々の積極的なレスポンスを期待してやまない。

「アキレスと亀」の問題が学生時代から私をとらえた。吉田洋一『零の発見』（岩波新書）の後半で解説されている記事が、何故か強く私の興味を惹いたのである。

連続に関するZenonの逆理のうち次の二つが特に有名である。

- 1) 飛んでいる矢は、各瞬間において一定の位置を占める。すなわち、矢は各瞬間においてはその位置で静止している。ゆえに、矢は運動することができない。
- 2) AchillesがA点、亀がB点を同時に出

発して、Achilleusが亀を追いかける。AchilleusがB点に来た時、亀は前進してB<sub>1</sub>点に進んでいる。次にAchilleusがB<sub>1</sub>点に来たとき、亀はさらに前進してB<sub>2</sub>点にいる。このようにしてAchilleusは亀に追いつくことが出来ない。

実際には矢は飛び、アキレスは亀に追いつき追い越すことが出来ていて、何の不思議もない。しかし、論理的には、Zenonの逆理を打ち破ることは容易ではなく、古来より種々論ぜられてきたが、未だ解決には至っていないらしい。

「一般の判断に反する結果を導く論説があって、その説に反論する正当な根拠を見出し難いとき、その説を逆理（または逆説）という」と、『岩波数学辞典』にある。

論理に誤りがないのに、現実と異なる結論が導かれるのは何故か。言葉の定義から吟味してかからなければならない。飛んでいる矢では、「瞬間」や「静止」など、アキレスと亀では「位置」や「時」や「同時」が問題であろう。確か「同時」ということの徹底的な追求からアインシュタインの特相対論が生まれてきたのであった。

私は「時間」にカラクリが秘められてい

ると考え、「時間の量子」の考えでZenonの逆理を“物理的”に解決する着想をあたため続けているが、もちろん、そのためにはしっかりした裏付けがあるし、検証がある。勇気もいるし「言う気」もいる。中学生以来30有余年を経過しても、まだ端緒にもつけていない。亀に追いつけないアキレスと同様である。

本の題名は忘れたが、図書室にあった本で「四色問題」というのを知った。これは、平面(または球面)上のあらゆる地図を塗り分けるのに、四色で十分かという問題である。四色必要なことは、すぐわかる。中学時代、数学のずば抜けて優秀な級友と、黒板にいろんな地図を書いてみては、この場合はどうか、などとわいわいやりあった。

数学的には、可約配置からなる不可避集合を求める問題として発展し、<sup>コンピュータ</sup>計算機を用いて約2,000個の可約配置からなる不可避集合を構成して、1976年肯定的に解決された と数学辞典に書かれてある。いわば腕づくで振り伏せた感がある。

同じ頃、角の三等分の問題もつきつけられた。この方は四色問題より、幾何学の諸知識を駆使する分だけ、“高尚な”問題に思われた。任意の角 $\alpha$ で挟まれる半径 $r$ の円弧の三等分の問題に切換えて考え、 $r$ を適当に選べば、あらかじめ三等分された円弧の大きさに合わせる事が出来るから解決できた……などといったため、前掲の数学的頭脳抜群のN君に、「ちゃんと証明してみせよ」と追及されたのを思い出す。中学生が一週間や二週間考えた位で出来るような問題ではない。結局、円弧の三等分をどこかで弦の三等分にすりかえていたことがわかり(実に初歩的なミス)、それ以後

は私もぐんと慎重になった。

証明のごまかしで想起されるのは、フェルマーの大定理である。

「 $n$ を2より大きい自然数とするとき、方程式  $X^n + Y^n = Z^n$

は0とは異なる整数解をもたない」

$n=2$ の場合が有名なピタゴラスの定理である。 $n=3$ や $n=4$ で解の例がありそうな気がするのだが、それは素人の予想というもので、自然はそんなに生やさしくはない。定理の提唱者自身、「この問題の証明は解ったが、それを書くにはスペースが小さすぎる」という意味の文を残したという程だから、容易ではなさそうだ。でも、このエピソードを読んで、これはずるい、というよりうまいごまかし方だと思った。さすがにヒューマー(ユーモア)の親戚「殖える魔術師」だと感心した。われわれがそんなやり口で歴史に残るような大定理・大仮説を提唱しようとしても、「そうは問屋がおろさない」こと請け合いです。

さて、話題は変わるが、88年初冬、香川大学図書館で、田島一郎『解析入門』(岩波全書)が目にとまった。手にしてみても、当館で利用度の比較の高い本であることを知り、なんとなくうれしくなった。

実は私はこの本の前身である『数学解析入門』(考え方研究社)が気に入って、大学教養時代、図書館の本を一冊丸ごとノートに筆写したのであった。こまかい字で書き写したので、大学ノート一冊にキッチリおさまったが、 $\epsilon-\delta$ 論法に、うまく誤魔化されたようでもあり、わかったような気にもなった。ベートーヴェンの大交響曲を聴いたあのような気持になった とでもたとえる事が出来るか。詳細は殆んど忘



れたが、連続関数でかつ至るところで微分不能、つまり、しわくちゃだらけの関数、いわゆる“Weierstrassのexample”も、任意の点で微分不能の証明が判った（ような気になった）。

Weierstrass-Bolzanoの定理や、Heine-Borelの被覆定理などは、冒頭に挙げた時間の連続不連続問題とも関連して、必ず役に立つと思っている。だが、しかし、高度の抽象的思考能力に欠ける私であってみれば、或る程度以上には思考の連鎖が発展しない。文字通り“微分不能”に行きあたるのである。

石鹼液でこしらえた膜をいろいろな形の針金にくっつけて、種々変わった曲面をつくり、楽しむことができる。これは微分幾何学でも興味ある問題だそうで、ずっと以前（20年程昔かも）雑誌『科学朝日』か何かに解説記事が出ていたのを記憶している。

他方、弾力性の多少おとろえた輪ゴムを使って、いろいろな閉曲線をつくってみるのも面白い。机の上に輪ゴムを横たえ、物指しか何かで軽くひねりを入れて放してやると、いろんな形の図形ができ、ゴムの交点の重なり方などをチェックしてみると、なんらかの規則性があるように見える。

これは「結び糸」の問題とあって、結び糸理論というものがある位だから深入りすると際限がないと思われる。一例として『岩波数学辞典』の巻末に40種類ほどの分類表が示されている。中学・高校あたりで、授業中、教師が例えばこの“ゴムひもの数学”などといったものを紹介して見せると、公式暗記や計算づけで嫌気がさしている（にちがいない）頭に新鮮な風を吹き込むことになりはしないか……などと考えて

みるのだが。

さて、「時間の量子」すなわち素時間論のアイデアは別として（ソビエトにも昔から時間の量子を提唱している学者がある）私が数学上の問題で思いついたことが一つある。その概要を以下に述べてみよう。

実数の四則演算のうち、乗法で（正数） $\times$ （正数）＝（正数）、（正数） $\times$ （負数）＝（負数）、（負数） $\times$ （正数）＝（負数）、（負数） $\times$ （負数）＝（正数）であって、記号だけで列記すれば、 $+-++$ という結果になる“規則”である。同様に、純虚数では、これが $-+-+$ となることは人の知るところである。では、 $+-+-$ 或いは $-++$ などとなるような“数”は考え得るかどうか。

現在の実数や虚数のカテゴリに入らないことはもちろんである。私はこれらを一応、擬数 quasi-number（又は超数 super number）と呼ぶことにして、数学専攻の研究者や学生に少し繋がりができると聞いてみることにしている。正面きって聞いていないから、正面きって答えてもらっていない。荒唐無稽で掛り合ってもらえない部類の問題提起かも知れないと自覚しているが、どう受け応えてもらえるか、なかなか興味深いものがある。

私は数学の道には進まなかった。進めなかった。数学的頭脳という点で、少年時代からさまざまな折にコンプレックスを感じてきたからである。中学時代以来、数学の良く出来る学友がそばにいたから、大学入学後に随分数学に熱を入れたが、追いつけず、格段に能力開発ができたという実感もない。そんなわけで、いつも数学研究者に



なければならない。柔道は日本の優れた文化である。この柔道を教えることによって、世界文化の上に寄与することが出来る——

先進国から一方的に学ぶだけの日本であってはGive and takeにならない、Give and takeにならなければ国際社会への貢献にはならず、それでは国際社会の一員として務めを果たすことにならないではないか、という嘉納の言は、明治は遠くなりけり、の今日、なお瑞々しい香りを以て爽やかである。

前後12回の公務を帯びた海外渡航の他、創始者自ら世界を歩き、国際柔道連盟創設に生涯を賭けたが、その実現を目の当りにして病没。オリンピック東京大会招致成功の重任を果たしての帰路、船中でその生涯を閉じたのだった。国際的活動人としてまさに劇的最期であった、と言って許されようか。

しかし、運動文化とは国際性ばかりで成り立っているわけではない。そこに国境を超え得る国際性を内包しているとしても、同時に運動文化は、特定の国、国民、地域、地方の歴史、文化、社会等々と隔絶して存在し得るのでなく、またその目的も機能も、その発祥の地域性から全く離れて存立する、というわけではないのである。柔道は、時に政治的ナショナリズムの尖兵の役割を果たしたり、異質な文化に対して排他的な立場を取ったときもある。発祥の地域性、即ち、時の国情、時代の要請が、文化よりも上位であった証左である。嘉納が「自他共栄」の名の下に世界平和を目論んだとしても、運動文化そのものは常に、時の人間の手に委ねられている、ということである。それゆえ運動文化とは、自己の内

に国際性を有するとしても、同時に地方性（国民性）という相対立する志向性をかかえて存在するものと言うことが出来よう。そして、運動文化が国境を越えるとき、この地方性が異文化間で文化摩擦を起こし、その諸側面が捨象洗練され、やがて国際的に通用する文化へとその普遍度を高めていくのである。

柔道は国際的に普及した。創始者自ら、またその門弟の幾多が海外に雄飛し、普及の最前線を行ったのである。そしてこの運動文化、柔道の地方性は洗練され、国際性が高められていった。それでは異文化の中に分け入った柔道の、国際化における文化摩擦はどこに在ったのだろうか。

国際化過程に在った柔道を、いま仮りに、運動技術、試合審判規程、及び普及活動をする人間（日本人）、の三つの側面に分けて考えてみると、文化摩擦は、試合審判規程、及び普及活動をする人間（日本人）のところに生じたのである。

柔道が持つ一面は、一定の運動様式に則る身体運動であり、競技的運動である。ここは運動技術の領野であり、人間であれば誰でも取り組める、身体部位の運動経過という形而下の側面である。そこでは地方性故の問題は少ない。講道館柔道の技術体系は、国境を超えて通用し、定着した。

けれども、もう一つの側面、運動技術ではない規範の領域、即ち、ルールやコードの領域はどうであったか。そこは「特定の国、国民、地域、地方の歴史、文化、社会等々」の「地方性」が直接向き出しているところである。それは思想の領域であり、その根底には、在り方に対する価値観が根ざしている。その価値観は、各国民族

の個別性の上に成り立ち、その個別の価値観と価値観とがぶつかるのである。ここが文化摩擦の波に洗われるところであり、相当の議論を覚悟で当たらねばならない国際化への試練、矢面のところである。

柔道の試合審判規程は、議論の末、国際ルールへとその装いも新たに姿を変え、世界に登場した。ところが、日本はどうであったか。日本は依然、日本のルール堅持の道を選択したのである。この二重性を如何にみるか、議論の分かれるところであろう。が、この現象、外部に『対して』自己を主張し、排他的にある在り方と通じていないか。

世界は一つのルール、日本は二つのルール（国内用と国際用）。ルールの統一は、現場（練習者、競技者達）が望む声でもあるのだが。

文化摩擦の二つ目、普及活動をする人間（日本人）のところは如何であったか。

普及を行う人間（日本人）も「特定の国、国民、地域、地方の歴史、文化、社会等々」を背後に持つ「地方性」の存在そのものである。それはルールやコードといった抽象的存在ではなく、理性と感情を持つ生身の存在である。そして相手もまた同様だ。国際化もその実際は、この生身の存在がするのであり、換言すれば国際交流とは、地方性を背後に持つ生身同士の交流現象に他ならない。国際交流とは人と人との交流、人間（じんかん）交流であり、交流の内容にはそれぞれ多分野が在る、ということである。筆者の例で言えば、私という人間（日本人）が「柔道という運動文化」を以て国境を超えた人間（じんかん）交流をした、ということである。そして、その国境を超えた人間（じんかん）交流のどこ

ろで、人間（日本人）としての地方性が、文化摩擦を生じさせる、という構図である。

それでは、人間（日本人）としての地方性が生じさせる文化摩擦とは、一体どんなものなのか、以下、日本人を対象に考えてみることにする。

まず、日本人としての地方性をどう考えるか、である。いろいろな側面への視点が可能であろう。ここではそのうち、私の過去の見聞から、「気分」というものについて論じてみたい。外国人に接するとき、気分が落ち着かない、しっくりした気分になかなかない等々の報告をよく耳にするからだ。そして、その不安定な落ち着かない気分支配されるのが不快な故か、日本人は外国人を避けようとする。ここを観察するに、日本人とは、或る方向性を持った「日本人の気分」とでも呼ぶべき特有の気分をその内面に持っているのではないかと考えるのである。

外国人に接するとき、日本人は何故、落ち着かない気分になるのだろうか。この落ち着かない気分こそ、日本人にとって真正銘の文化摩擦の正体なのである。

それでは「日本人の気分」とは何だろうか、少しく敷衍してみたい。

一般に「気分」とは、「きもち。心もち。気色」或いは「あたり全体から醸しだされる感じ。雰囲気」を意味する（『広辞苑』）。心理学的には、「気分とはそれを引き起こす直接の刺激が不明であり、微弱で持続的な感情である」（『心理学辞典』平凡社）とか、「爽快とか憂鬱とかいった自分自身の心身の状態についての感情すなわち状態感情で、物事によってひきおこされる対象的

感情ではない。一方の極に健康感、からだのだるさ、身体的不快感などの体感感情を、他方の極に法悦とか恍惚とかいった状態たるエクスタシーつまり意識感情をおくことができる」(『岩波心理学小辞典』)とされている。気分とは、日常的には心もち、心理学的には状態感情である。

では、「日本人の気分」とは——。「日本人の気分」とは、以上をふまえてさらに具体的に、次のような12の心的傾向をもって構造化されているのである。これらは、私自身が海外在住の日本人の行動や平素見る日本人の行動の観察、並びに私自身の外国人との交流体験等々より導き出した仮説である。

①恩着せ ②同調 ③甘え ④独り善がり ⑤過干渉 ⑥受け身 ⑦卑下  
⑧閉鎖的 ⑨排他的 ⑩被害者意識 ⑪画一的枠志向 ⑫口と心の別  
語句の定義は次の通り。

- ① 恩着せ＝頼まれてはいないのだがその人を思って事を行い、その結果、評価されないと折角してやったのに、と責めること。
- ② 同調＝自己主張は控える方向におき、その反面、周りに合わせていこうとし、また人に対しても、こちらに合わせて同じように在るよう期待すること。
- ③ 甘え＝身勝手に他者依存すること。
- ④ 独り善がり＝思い込みを吟味もなく善しとしていること。
- ⑤ 過干渉＝お節介に、他人の領域に立ち入った言動、行動をとること。
- ⑥ 受け身＝思っても自発的に行動せず、外からの働き掛けを以て行動すること。

- ⑦ 卑下＝他人に対して蔑視的であり、自身のプライドは隠して自身を下に置くこと。
- ⑧ 閉鎖的＝好みの人やまた同県、同窓等の枠(同質)を以て仲間関係をつくろうとし、それ以外の人やガイジン等(異質)に対して、心理的壁を以て在ること。
- ⑨ 排他的＝好みの人やまた同県、同窓等の枠(同質)を以てつくっている仲間関係以外の人やガイジン等(異質)に対して、避けるようによそよそしく在ること。
- ⑩ 被害者意識＝自分に関わってくる事を被害的に受け止めること。
- ⑪ 画一的枠志向＝個性的に在ることを恐れ、社会に既成の画一化されたところで在ろうとすること。
- ⑫ 口と心の別＝口で言うことと心の中で思っていることが違うこと。

以上を内包する「日本人の気分」が、阻害されず違和感のない状態にあるときは、実に、内包されるこれらの心的傾向が、程々にその傾向通り機能しているときである。そのとき「日本人の気分」は、自ずと然り、で平穩である。国際交流とは、まず以て異質との交流であるから、異質に対して閉鎖的排他的な日本人には、それだけで早、気分平穩ならず、である。ここに、日本人の生じさせる文化摩擦の根が在るのである。

同質好みの日本人が異質と交流せざるを得ないとき、如何に在ろうとするだろうか。それは、異質に対して質的量的共に最小限のつき合い方をするか、或いは相手に日本文化を押し付けて同質化を試みるか、或い

は異質を劣等蔑視の位置に置き、自らを君臨支配の位置に置いて、優越快感の保持で生きるか等々で対処しようとする。

最小限のつき合い方とは、必ずしも快いことではない。また、自分の方が劣等の位置に置かれる状況も不快である。国際交流において、自分の方が劣等の位置に置かれるような状況はないか。ある——実に、英語運用能力の点である。

日本人にとって、英語とはどのように受け止められているか。それは学科の一つ、と受け止められているのである。学科の一つということ、成績と密接に連関していることでもある。即ちそこは、優良不可可という優劣の世界として意識されている。日本人はこの経験則に支配され、英語、と言えども常に出来不出来を考え、感じるようになっている。そして不出来の場合、劣等を感じ、これで嫌な気分となってくる。異質との交流は、その殆どが英語で行われる。それは日本人にとって、常に学科と向かい合っている気分である。この気分が憂鬱だし、快くもない。一般に英語で聴き話すことの出来ない日本人にとり、それは苦痛であり、堪まらない瞬間である。出来るなら避けて通りたい。かくして、異質を遠ざける心的傾向は補強され、その反動で、日本語で済む同質志向の心的傾向はさらに強化され、やがてそれらは動脈硬化し、かくして異質に対して兎角に閉鎖的排他的な日本人の在り方が形成されてくる、というわけである。

もう一つ。別の角度から。

日本人にとっての心の安寧、安心立命の方を觀てみよう。

日本人にとっての心の安寧、安心立命は何だろうか。母の懷に抱かれることが。左

様。母に限らず、日本人の心の安寧、安心立命は、他者依存である。ここに、依存する他者とは同質の他者である。他者依存を以て安心した気分になる。平素から安心した気分になりたい日本人は、目の前の他者を同質化すべく、或いはまた、目の前の他者と同質化すべく、自他に同調を強いる在り方をするのである。

西歐人の自立的に對し、日本人の依存的が際立っている。他者依存を以て安心した気分になり、その延長線上に、同質集団が存在してくる。ここに異質の入る余地はない。同質集団は異質に對し、閉鎖的であり排他的である。日本人の説く「和」は、この同質集団内の限りにおいて極めてよく機能する。だが一方、その機能は、異質に對しては極めて弱くまるで空文の如し、で、その神通力は無いに等しい。

同質に對して他者依存し、心の安寧を得、異質に對しては、他者依存不可ゆえの無縁の対象とし、排他する。かくして異質を遠ざけ、異質に對して兎角に閉鎖的排他的な日本人の在り方が形成されてくる、というわけである。

柔道は今や国際柔道連盟の下、五輪競技大会の一正式種目となつて、國際的に走着し、その技能も欧米、隣國等、世界一流の水準に達している。しかし、日本は依然として日本のルールを持ち、行い、そういう國々の柔道に對して一定の距離を置く。そういう國々で行われている柔道をして、本来の柔道から逸脱している、とする立場をとっているのである。世界各國への量的拡がりには認めるものの、そこに展開する柔道の質的側面については必ずしも肯定していない。本来の柔道とはこうである、との積

極の広報活動もしないままに。この在り様が、日本人の排他的意識のなせるワザでないことを信じない。その在り様が、柔道発祥国、本家等々の矜持的意識に動かされたものではない、ということ。

文化。それは民族の創造的英知の結晶である。一國に生まれた個性的な文化が社会内伝播し、さらに国境を越えもする。その道程は、普遍性への洗練研磨の道であり、そこに軋轢も生じるが、やがて止揚され、国際化されて、人類共有の財産となる。

人間（日本人）。国境を越えてする人間（じんかん）交流の際、「日本人の気分」が引き起こす文化摩擦は止揚され、普遍性が高められ、国際化されていくか。即ち、如何なる異質を前にしても、気分平穩の交流

が出来るようになるだろうか。そうなるために、国際日本の将来に向けて、如何なる心的傾向が養われなければならないだろうか。

それは、国境や民族を越えて通じる人間としての道理を顕す、という心的傾向である。しかしてその実態は——私にはいまだナゾである。

—完—

「付記」 長きに亘り、拙文にお付き合いして下さいました読者諸兄姉の皆さま、並びに拙稿の場を与えて下さいました「一般教育研究」編集委員会に対し、心から感謝の意を表したいと思います。皆さま、本当に有難うございました。それでは、さようなら。